

中学校 国語科



1 学習評価で大切にしたいこと

(1) 年間を見通した学習評価

国語科においては、1つの指導事項を年間で複数回繰り返して指導し、螺旋的、反復的に繰り返しながら資質・能力の定着を図ることを基本としています。そのため、年間を見通して、単元の目標や評価規準を設定することが重要になります。

「知識・技能」は各領域において指導が必要になります。「思考・判断・表現」の各領域において重点的に指導し評価する指導事項や、その単元で取り上げる言語活動例の確認も含め、指導事項が一覧できる年間指導計画表の作成が求められます。（「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」p47～50参照）

(2) 単元目標の実現のための言語活動の設定

当該学年で重点的に育成すべき資質・能力を明確にして、学習指導要領の言語活動例を参考に適切な言語活動を設定します。社会生活に必要とされる言語活動を設定し、試行錯誤しながら課題を解決する過程で言語能力を習得・向上させていけるような指導が求められます。

2 評価の観点と趣旨

「指導と評価の一体化」を図るためには、学習指導要領の目標や内容と合わせて、下記に示す評価の観点と趣旨を確認することで評価の基本的な枠組みを捉えることができます。単元の評価規準を作成する際に、この趣旨を踏まえた上で、単元で中心的に扱う指導事項を位置づけていきます。

なお、国語科においては、基本的には「内容のまとめりごとの評価規準」を単元の評価規準とします。

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っている。	「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域において、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつ価値を認識しようとしているとともに、言語感覚を豊かにし、言葉を適切に使用している。

3 内容のまとめりごとの評価規準を作成する際のポイント

知識・技能

当該単元で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を「～している。」として作成します。
育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもあります。

思考・判断・表現

当該単元で育成を目指す資質能力に該当する〔思考力・判断力・表現力等〕の指導事項について、その文末を「～している。」として作成します。
各指導事項の冒頭に当該単元で指導する一領域を「○○において」と明記します。
育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもあります。

授業構想の流れ

- Step 1 単元で取り上げる指導事項の確認
- Step 2 単元の目標と言語活動の設定（単元の目標を実現するために適した言語活動を、言語活動例を参考にして位置づける）
- Step 3 単元の評価規準の設定
- Step 4 単元の指導と評価の計画の決定
- Step 5 評価の実際と手立ての想定（実際の学習活動を踏まえて、「Bと判断する状況」の具体的な姿を明確に持つ必要がある）

主体的に学習に取り組む態度

国語科における「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして、意思的な側面を評価します。なお、国語科では、次の4つの内容を全て含め、単元の目標や学習内容等に応じて、その組み合わせを工夫して評価規準を設定します。文末は「～している。」とします。

- ◆ 粘り強さ（例・積極的に ・進んで ・粘り強く 等）
- ♥ 自らの学習の調整（例・学習の見通しをもって ・学習課題に沿って ・今までの学習を生かして 等）
- ◆ 他の2観点【知・技】【思・判・表】において、重点的に指導する内容（特に粘り強さを発揮してほしい内容）
- ◆ 当該単元の具体的な言語活動（自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動）

例

第2学年「B 書くことⅡ」（言語活動例：B（2）イ）
本単元の言語活動：職場体験でお世話になった職場へのお礼状を書く

ポイント

「粘り強さ」と粘り強い取組を行う中での「自らの学習の調整力」を適切に評価できる評価規準を作成すること。

単元の評価規準例	粘り強く（◆）読み手の立場に立って、表現の効果などを確かめて文章を整え（◆）、これまでの学習を生かして（♥）、お礼状を書こうとしている（♣）。
----------	---